

[第1章] なぜフィルムを保存するのか？

米国のフィルム遺産は米国そのものといえるほどの多様性を持ち合わせている。米国では100年以上のあいだ、プロもアマチュアも映画の撮影機とともに国内を旅し、風俗に触れ、物語を編み、日々の出来事を記録してきた。つまり、主流メディアに撮影されることのなかった人々や土地も記録の対象だったといえる<sup>1</sup>。

ドキュメンタリー・ニュース映画・アヴァンギャルド・独立系作品・ホームムービー・産業映画・政治広告・科学映画・人類学的記録・トラベログ・フィクション…フィルム特有のパワーと即時性を秘めた共有財産の真価は、動く映像に記録された最初の一世紀の記憶の集積ともいえる作品群を救い、共有することによって、はじめて発揮されるものだ。

長いあいだ、こうした多種多様なフィルムの価値に光が当てられることはなく、映画製作といえばハリウッドの劇場用映画が連想されるばかりで、公文書館・図書館・博物館に収蔵されている非劇場用映画に目が向けられることはなかった。唯一無二の作品は、手を触れられないまま棚に積まれていたのか、あるいは単に上映するには不向きだったのか。20年以上に渡る保存への取り組みのおかげで、今まさにこうしたフィルムが注目を集めつつある。そして、我々が文化史を深く理解する上でも、より包括的に米国の映画というものを思い描くようになってきている。

1. フィルムアーカイブのコミュニティ

本テキストの真意を理解していただくために、フィルムアーカイブの性質の変遷に少し触れておこう。フィルム保存の重要性が注目されるようになった最初の10年間は、映画史の初期に製作され、見捨てられてきた商業映画の救済が優先課題だった。この仕事に挑んだのはごく一部の非営利組織や公共機関に過ぎなかったが、劣化の進行しているナイトレートを不燃性フィルムに複製する技術が磨かれ、その成果は館内上映や特別な映画祭の場で披露さ

---

<sup>1</sup> 本章は次の文献から多くを引用している。『Film Preservation 1993: A Study of the Current State of American Film Preservation, 3 vols.』(米国議会図書館 1993) [cweb.loc.gov/film/study.html]、『Redefining Film Preservation: A National Plan』(米国議会図書館 1994) [cweb.loc.gov/film/plan.html]、『National Film Preservation Foundation, Report to the U.S. Congress』(NFPF 1997~2002)、『Treasures from American Film Archives: 50 Preserved Films』(NFPF 2000)

れるようになった。

先駆者たちが国際フィルムアーカイブ連盟(FIAF)を創設したのは1938年のことだった。FIAFが目指したのは、専門職の実践のための情報交換及び標準化を推進することだった。1970年代後半まで、《ナイトレート》を所蔵する米国内の主要なフィルムアーカイブは、ジョージ・イーストマン・ハウス、米国議会図書館、ニューヨーク近代美術館、UCLA フィルム&TV アーカイブ、そして国立公文書記録管理局（米国政府の製作したフィルムの公式な保管先）の5団体だった。

映画研究はハリウッド発の劇映画の枠に収まらなくなったが、それはフィルムアーカイブのコミュニティも同じことだった。米国議会の指示で米国議会図書館が1993年に発行した研究報告『Film Preservation（フィルム保存）』は、公共組織や非営利団体が地域映画・テーマ性の高い映画・民族映画などを収集しはじめたことを報告している。1991年以来、映像アーキビスト協会（AMIA）は、専門職としての枠組みを提示することによってフィルムアーカイブ活動を活性化させてきた。AMIAのおかげで各地域の専門家たちは、FIAF加盟アーカイブやハリウッドの映画産業の中で働く仲間たちと出会うことになった。AMIAはアーキビストの養成や年次会議の開催、メーリングリストや研究部会による情報共有などの機会を提供している。1993～2003年のあいだに、その会員数は4倍に増えた<sup>2</sup>。

AMIAの会員がすべてではない。研究価値のある動的映像資料を所有する組織はほかにも数多く存在する。こうした映画は、視聴覚資料、デジタル資料、紙資料中心の特別なコレクションの中に紛れている。2002年にプログラムの参加者を対象とした調査が完了し、全米映画保存基金（NFPF）が明らかにしたところでは、公文書館・図書館・博物館、そして歴史協会において、コレクションが複数のメディアで構成されているのは例外的なことではなく、ごくあたりまえのことだ<sup>3</sup>。こうした組織の中に、フィルムの管理だけを任されているような専門職はいない。この調査の回答者の90%が、一人で複数のメディアにまたがる資料に対して責任を持っている。そして半数以上が、フィルムのほかに3種類以上の資料にまたがってキュレーターとしての職務を果たしている。

---

<sup>2</sup> AMIAは、動的映像資料の管理運営のための「Film Archives Advisory Committee」と「Television Archives Advisory Committee」という二団体を前身とする組織だ。

<sup>3</sup> NFPFのプログラム参加者を対象とした2002年の調査報告書に掲載されているクレア・ノランの分析による。この調査の回答率は93%だった。

マルチメディアを扱う公文書館・図書館・博物館は、フィルム保存運動において最も新しい波となっている。フィルムが調査対象となるドキュメンテーションとして注目されるようになるにつれ<sup>4</sup>、より幅広い組織でフィルムが収集及び利用の対象となり、フィルムアーカイブの定義自体も拡張している。

## 2. オーフアン〔孤児〕フィルム

フィルム保存においては、非営利と営利のあいだに非公式な境界線がある。ビデオ・DVD・ケーブルテレビ・その他それらに付随する市場の要求が拡大するにつれ、商業映画の製作者たちは、自らが権利を持つフィルムに以前より高い資産価値を見いだすようになった。近頃の映画産業は、保存及び復元に多額の予算をつぎ込んでいる。現状で公共機関や非営利団体が営利目的の劇映画の復元を手助けする際には、フィルムを所有する団体との共同作業として成立することが少なくない。一般にこうしたプロジェクトには映画史的な重要性が求められ、アーカイブは唯一無二のフッテージや特別な専門技術を提供する。

しかしながら、多くのフィルムはこうした商業的な保存プログラムの蚊帳の外にある。米国議会図書館が1993年におこなったフィルム保存に関する研究報告の影響で、見捨てられている資料を救済していくことの必要性に注目が集まり、こうしたフィルムは《オーファンフィルム》と呼ばれるようになった。オーファンフィルムには明確な著作権保持者がおらず、今後の保存に必要なコストをまかなうだけの商業価値もない。リスクがもっとも高いとされるのは、ニュース映画・地域の記録映画・アヴァンギャルド・独立プロ作品・無声映画時代のフィルム・アマチュア作品・科学映画や文化人類学的映像といったジャンルだ。オーファンフィルムの保存は往々にして、非営利団体や公共機関に委ねられている。フィルム保存に向けた米国政府からの助成金も、現在ではほとんどすべて、公的資金なくしては救われる可能性のほとんどないオーファンフィルム資料に対して与えられている。

研究テーマとして興味関心が高まり、そして、フィルムが文化的かつ歴史的記録として評価されるようになり、オーファンフィルムは、公文書館・図書館・博物館のコレクションに居場所を見出だした。すべての調査対象資料の特徴だが、フィルムもご多分に漏れず、クオリティー・コンテンツ・歴史記録としての価値といった点で玉石混淆だ。アーカイブ活動や

---

<sup>4</sup> 参照：Stephen G. Nichols・Abby Smith（著）『The Evidence in Hand: Report of the Task Force on the Artifact in Library Collections』（図書館情報資源振興財団 2001）p35～38  
[[www.clir.org/pubs/abstract/pub103abst.htm](http://www.clir.org/pubs/abstract/pub103abst.htm)]

保存活動によってすべてのフィルムが救済されるわけではなく、ある程度の取りこぼしは避けられない。保存に使うことのできる財源が限られている以上、利用者のためにできる限り長期に渡ってフィルムの延命をはかるために、その収集及び管理の領域を規定することこそ、各組織が責任をもっておこなうべきことだ。

本テキストは入門書として歴史的かつ文化的価値のあるフィルムを取り上げるが、ハリウッドの劇場用映画やフィルムの芸術性に言及することはない。本テキストは、フィルム保存に向けて段階的な取り組みに着手しようという収蔵専門職を支援するためのものだ。保存用コピー作成のための優先順位付け・収蔵・保管・複製・アクセス提供を、オリジナルのフィルムとそのコンテンツの延命に向けて、より幅広い視野を持った計画へと統合していく。『フィルム保存入門』は、各組織でフィルム保存に日夜励む人々のためのものだ。

### 3. フィルム保存の専門用語

リバイバル上映されるハリウッド映画の宣伝文句の中で、《保存された》とか《復元された》といった言葉が混在していることがある。話を先に進める前に、公共団体や非営利組織のコレクションにおけるこうした用語の定義を明確にしておこう<sup>5</sup>。

◇ 保存 Preservation 実践の場でも日常の中でも、保存という言葉は長いあいだ複製と同義で使われていた。フィルムが新しいストック、あるいは安定性のより高いストックに複製されたか否かという意味で、アーキビストはフィルムが《保存された》か否かを判断していた。

しかしながらここ 10 年のあいだに、保存という用語はより広い意味で使用されるようになり、フィルムを保護してコンテンツを共有するために必要不可欠な活動の流れ全体を指すことが多くなった。現行のフィルム保存とは、フィルムの扱い方・複製・収蔵・アクセス提供などの概念を包括するものだ。それぞれの概念については、本テキストの中で順を追って言及する。

フィルム保存とは単発の作業ではなく、進行形の行程だ。その技術が改善され、常識が変化すれば、時には再び複製を作成することにもなる。フィルム以外の博物館の器物や図書館

---

<sup>5</sup> パオロ・ケルキ・ウザイ (著) 『Silent Cinema: An Introduction』 (BFI 2000) の p65~67 も参照のこと。

の蔵書と同じように、フィルムの延命のためには継続的なケアが必要だ。

◇ 保管 Conservation 保管とは、オリジナルのフィルム素材を保護すること意味する。フィルムには、物的価値もあれば情報のキャリアとしての価値もある。多くの組織が同じコンテンツの代用コピーを作成することでオリジナルを守り、むやみに手を触れないようにしている。つまり上映や研究にはコピーを使用する。そしてオリジナルのフィルムは、物理的な劣化を抑制するのに適した環境に収蔵しておく。

◇ 複製 Duplication 複製とは、代用コピーの作成を意味する。保存の責任者は、フィルムに記録されている画と音のコンテンツが正確に再現できて、かつ、将来的に改めて閲覧用コピーを作成する際に元となるマスター素材が保護できて初めて、フィルムが安全圏にあると見なす。保存の責任者が保存用コピーを作成する際、そのフィルムが初めて上映されたときに最も近い素材を元にするのが一般的だ。

◇ 復元 Restoration 復元とは、単に物理的に残存するオリジナル素材をコピーするだけでなく、そのフィルムをある特定の版として再構成する試みを指す。理想的には、同一作品の残存するあらゆる素材を比較検討し、製作時の記録や上映の歴史に則ってばらばらの素材を順序正しく並べ、場合によっては、これまでの劣化を補うために画にも音にも手を加える作業も含む。フィルム復元は、芸術作品や紙資料のそれとは異なり、常にオリジナル素材の複製を伴う。

◇ アクセス Access アクセスとは、フィルムのコンテンツを一般公開する過程を意味する。アクセスという用語は、内部における調査研究への寄与からネット上での公開に至るまで、その意味合いは組織によって様々だ。公文書館・図書館・博物館において、現在のところ最も一般的なアクセス用のメディアはフィルムとビデオだ。

ケース・スタディー：オクラホマ歴史協会

『This is Our City』(1950年 600ft. 35mm ナイトレート 白黒 音付)

フィルムは時を経て、そこに描かれているコミュニティにとってまったく新しい意味を纏うことがある。オクラホマ歴史協会が保存する政治的な広報映画『This is Our City』は、フィルムが歴史への案内窓口になり得ることを証明してくれる。



1940年代後半、オクラホマの政治家たちは、自らのコミュニティの急激な変化を目の当たりにしていた。コンスタントに新たなビジネスを呼び寄せるために、街は道路建設、衛生面の改善、洪水防止策、さらに空港・図書館・公園などの建設の必要に迫られていた。そこで1950年5月、政治家たちは公債発行の可否を住民投票にかけることにした。

商工会議所は公債の購入を促すための委員会を結成し、看板、新聞広告、ラジオスポット、街宣を含むマルチメディア・キャンペーンを繰り広げた。この取り組みの中心に位置したのが『This is Our City』だった。この5分の政治的な広報映画は、住民の誇りに訴え、公債によって平均的な家庭生活がいかに向上するかを説き、投票日が近づくと街中の映画館や集会場で上映された。そして住民の80%が公債発行に賛成票を投じ、3,600万ドルの予算が計上された。

公債の受給者の一つだったオクラホマ・メトロポリタン・ライブラリー・システムは、『This is Our City』の35mm ナイトレート・プリントを救済し、オクラホマ歴史協会に寄贈した。2001年、同協会はフィルムの不燃化と閲覧用ビデオ作成のためのテレシネにかかるコストを助成金でまかなった。以来、この作品は米国議会図書館のフィルム保存を祝う全米ツアーの途中、オクラホマの会場で上映されたり、映像の一部がテレビ番組の中で使用されたり、現在の公債キャンペーンに活用されたりしている。

選挙キャンペーンや、それがオクラホマの発展に果たした役割を教えてくれるのは、残存する多くの歴史資料・新聞記事・パンフレット・商工会議所の記録だが、こうした紙資料以上に『This is Our City』は、当時の生活のリズムや雰囲気をあますことなく伝えてくれる。1950年当時の人々に、この公債発行キャンペーンがどのように映り、どのように理解されていたのかを、この映画は50年以上の隔たりを感じさせることなく教えてくれるのだ。